基本は昔も今も同じ、昭和40年代の写真で見る 林業のキホン作業

林業の仕事を知る上で、基本的な流れとその内容を、なつかしい写真入りで解説します。昭和40年代は、現在と違い伐採や植栽がさかんに行われていた時代でした。現在は、当時植栽されたものの間伐作業等が重点的に行われています。

現在では、これらの諸作業は一部機械化され、より効率的に進められるようになりましたが、基本は変わりません。多くの先人の知恵と汗の結晶である林業のキホン作業をこの機会に見直してみましょう。

苗木運搬

苗木や肥料を担いで運搬。道路も何もない場所にスギが植えてあったら、かつてこのように人力ですべて運んだ証し。

植栽

苗木を植える作業。植栽時には縄などを張り間隔をきれいに揃える。苗木には土が付いておらず乾燥に弱いことから、植栽地に仮植（かしょく）し、植える分だけ掘り出して使う。

根踏み（ねぶみ）

苗木を持ち、左右に揺すりながら足で踏むことで、苗木が抜けたり流れたりすることを防ぐ。

下刈

苗木を植えてから10年程度、毎年行う作業。草を刈らないでおくとスギに日光が当たらなくなるため、スギが小さい時は年２回行う。

雪起し

雪の圧力で倒れた造林木を、雪消え後、すぐに縄などで引っ張り起こす作業。縄は外さなくても次第に腐ってなくなる「わら縄」がよく使われる。上の写真は、雪解け時期の若齢スギ林の状況。

枝打ち

節のない優良な材を生産するために行うが、効果としては雪害の防止や病虫害からの保護などの面もある。写真はナタによる枝打ち（下）とはしごを使った枝打ちの様子。樹皮むけを防ぐために、基本的には晩秋から冬期の生長休止期に実施する。

除伐

造林木以外（スギ以外）の樹種の除去が中心だが、スギの生育不良木（病害虫被害、雪害等）の除去も含む。下刈終了から数年を経て１～２回ほど実施される。

間伐

植栽後 20～30 年程度経過すると、造林木（スギ）同士で競争が始まり、次第に優劣が付いてくる。劣勢のものを除去し優勢のものを残すことにより、主伐時に価値の高い林を作ることを目的とする。近年は、搬出間伐が重要となってきており、間伐した材は建築材、合板材料、チップ等さまざまな用途に利活用されている。ただし、ある程度混みあった林を伐採する場合は、かかり木が頻発するため、間伐従事者には高い技術が求められる。

主伐

林業の最終段階で、収穫とも言う。新潟県の人工林ではここまで80年程度かかる。写真（左）は、ブナの天然林伐採風景（架線集材）とスギ人工林の伐採木の集材・運搬風景。

地拵え（じごしらえ）

植栽するための準備作業。スギ等の伐採跡地に残った枝葉等を集め、筋状に配置したり、火を入れて焼き払ったりして、植栽しやすい環境にするもの。